

海外研修に参加した大学生の異文化コミュニケーション能力 —2016年度ハワイ研修参加学生の事例から—

仲 里 和 花

要 約

日本の多くの私立大学において、「海外研修プログラム」は、異文化コミュニケーション教育のための最適な教育方法の一つとして実施されている。「海外研修プログラム」の利点は、異文化コミュニケーションの概念や知識を頭で学ぶのではなく、現地の人々との直接交流としての体験学習を通して、相手に対する理解、彼らと共存できる情動や態度を直接体得することにある。

筆者は、2016年度、沖縄キリスト教学院（以下、「本学」と略す）のハワイ研修に引率者として参加した経験から、本研修の参加学生達が、ハワイの人々との交流を通して、異文化コミュニケーション能力を身につけることができたか疑問を持った。そこで、彼らが研修後提出した「海外研修レポート」を分析・考察した結果、彼らは、研修を通して、異文化コミュニケーション能力の認知、情動、行動の3つの側面をバランスよく学習していることがわかった。本稿では、本学のハワイ研修プログラムが、異文化コミュニケーション教育において有効な教育方法であることを実証していく。

キーワード：異文化コミュニケーション能力、認知、情動、行動、海外研修

1. はじめに

今やグローバル化社会を迎え、人やモノ、情報が国境を越えて行き来する時代にあって、異文化コミュニケーション教育の必要性が叫ばれている。異文化的背景を持つ人々を理解し、彼らとどのように共存していくかという課題は、異文化コミュニケーション教育の最大のテーマである。そのため、様々な教育機関で、その課題を含めたカリキュラムをどのように編成するのか、その最適な教育方法は何か、真剣に模索されている（田淵1992）。

異文化コミュニケーション教育の最適な教育方法の一つとして、「海外研修プログラム」が挙げられる。今、日本の多くの私立大学において、種々の体験学習を組み込んだ海外研修プログラムが実施され、それを単位として認定する大学も少なくない。

本学でも「ハワイ研修・海外幼児教育研修」を1993年から23年間にわたって実施している。本研修は、ハワイ大学のKaua'i Community College（以下、「KCC」と略す）が受け入れ先となって、ハワイの自然・文化体験学習、現地生活体験、KCCでの英語授業参加など様々な体験学習を組み込んでいる。

筆者は、2016年度、本研修の引率者として、このプログラムに参加した。本研修はハワイの文化・歴史・言語・生活を受け身的に学ぶ一方向的なものではなく、学生達が沖縄の伝統文化を披露したり、沖縄の文化・

歴史・植物について英語でプレゼンテーションするなど、相互交流的な目的を持っている。本稿の目的は、本研修に参加した学生達がどのような異文化コミュニケーション能力を身につけることができたのかを検証することにある。

2. 先行研究

「異文化コミュニケーション能力とは何か？」という定義については、様々な研究者によって議論されている。異文化コミュニケーション能力とは、異文化をもつ人と実際に交流できる能力と定義できるが、この能力には、一般に、「効果性」と「適切性」の2つの要素が欠かせないと言われている（石井1997:17）。「効果性」とは、「異文化の人々と相互作用をして、自分の目的が達成できること」であり、「適切性」とは「異文化の様々な状況の中で、適切でふさわしい行動がとれること」である（石井1997；同掲書）。つまり、異文化コミュニケーション能力とは、異文化の人々と適切にコミュニケーションを取りながら、自分の目的を達成できる能力ということができる。

異文化コミュニケーション能力には「認知＋情動＋行動」のような構成要素がある。ここでは、異文化コミュニケーション能力とはどのような能力かということを理解するために、異文化コミュニケーション能力の構成要素について、2つの先行研究を紹介する。

宮原（2006）は、異文化コミュニケーション能力の構成要素として、1）観察力、2）共感力、3）判断留保力、4）柔軟性、5）忍耐力、6）対人関係能力、7）適正な自己理解の7つの項目を挙げている（243-246）。例えば、1）観察力とは、自分が常識と考えてきたことと異なる行動、考え方と接した時に、感情的な反応を抑えて、じっくり観察する能力である。2）共感力とは、どの文化にも固有の考え方、行動の仕方があり、現地の人達がそれらを長い間守り続けてきたことに敬意を示すことなどがある。3）判断留保力とは、相手の行動を観察し、相手の立場に立って考え、一応の敬意を示すという一連の行動を通して、相手の文化の価値判断を控える能力である。4）柔軟性とは、違った考え方、行動のパターンに出会ったら、「こんなやり方もあったんだ」と柔軟な認識をすることである。5）忍耐力とは、異文化で理解できないこと、不明瞭なことがあっても、結論を急いだり、優劣の判断をしないで、「ま、いいか」といった気持で臨むことを意味している。6）対人関係能力とは、具体的には、挨拶をしたり、聞かれたことは返事をしたり、相手の話を真剣に聞いたり、相手との関係を維持する能力である。7）適正な自己理解とは、例えば、異文化で生活すると、これまで持ち続けた自己アイデンティティが揺るがされたり、自信を失わされたりするような状況に直面した時に、自己をしっかり見つめ、自分の能力を知り、現実的なゴール設定をすると同時に、そのゴールが達成できないことがわかったら、できるだけ早く軌道修正し、新たなゴールの達成方法を検討することなどが挙げられる。

また、石井（2013）は、異文化コミュニケーション能力の構成要素を1）認知、2）情動、3）行動の3つの区分に沿って解説している（209-210）。1）認知とは、異文化コミュニケーションにおいて必要とされ

る知識、ものの見方、考え方などを指す。具体例としては、知識の保持、判断留保、知的能力、非自文化（自民族）中心主義、文化相対主義などを挙げている。例えば、知識の保持には、文化一般的知識と文化特定の知識があり、前者は一定の集団には、共有され、学習され、伝承され、物事に意味を与え、ルールを示すといった特性があるといった知識であり、後者は、個々の文化の特徴に関するもの、例えば、日本文化においては人々が個人の意見を尊重するよりも集団内の人間関係を重視する価値観に基づいて考え行動するといった知識である。2）情動とは、異文化コミュニケーションにおける感情や態度に関わる能力を指す。開放性、エンパシー、感情をコントロールする能力、自尊心を保つ能力、ストレスに耐える能力などを挙げている。3）行動とは、異文化コミュニケーションにおいて適切かつ効果的に行動する能力を指す。異文化を背景とする他者に対して具体的な行動で敬意を示す能力、文化の中で与えられた役割を適切な行動として実行に移す能力、やりとりを通じて対人関係を築く能力などを挙げている。

石井（2013；同掲書）は、Ruben（1976）と山岸ら（1992）の研究を参考に、認知・情動・行動による異文化コミュニケーション能力の分類を以下の表1のようにまとめている。

本稿では、上述した石井（2013；同掲書）の分類（表1参照）を理論的枠組みとして用い、2016年度、本学が実施したハワイ研修プログラムを通して、参加学生達が、どのような異文化コミュニケーション能力を身につけることができたのかを検証する。

3. ハワイ研修プログラムの概要

「ハワイ研修・海外幼児教育研修」は、本学のカリキュラムに「海外研修」（短大英語科／四大英語コミュニ

表1 認知・情動・行動による異文化コミュニケーション能力の分類

	認知	情動	行動
Ruben（1976）による7項目	知識の保持、判断留保	エンパシー、寛容性	敬意、役割行動、相互作用の管理
山岸ら（1992）による12項目	自文化（自己）への理解、非自民族中心主義、外国文化への興味、知的能力、判断力	感受性、寛容性、柔軟性、オープンネス	コミュニケーション、マネジメント、対人関係

石井敏他（2013）『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』（表9-1、p.209）

ケーション学科)、「海外幼児教育研修」(短大保育科)の科目名で組み込まれ、毎年2月に約2週間、実施されている。本調査では、短大英語科/四大英語コミュニケーション学科の学生が参加する「海外研修」に焦点をあてて考察していく。

3.1. 事前学習

事前学習として、参加学生には、「沖縄とハワイの文化等の比較」という題のレポートを書いてもらった。また、「事前学習用シート」(ハワイの歴史・文化・言語など)を利用して、ハワイの調べ学習をしてもらった。

また、研修期間中、英語系の参加学生は、KCCの授業でプレゼンテーションを行うことが課せられていた。学生達は複数名でグループを結成し、パワーポイントを使用して英語で発表する。その事前準備については、本学の柳田正豪准教授が中心となって、指導ミーティングを5回実施した。①「沖縄の今」(沖縄のポップカルチャー、世界遺産、衣食住など)、②「本学の案内」(本学の歴史、キャンパスライフなど)、③観光学「沖縄の観光業のユニークな取り組み」、④植物学「私の島・コミュニティにとって大切な植物」のテーマのもと、各グループが10分程度のプレゼンテーションを準備した。

3.2. 現地での研修

現地での研修は、2017年2月12日(日)から26日(日)の15日間にわたって実施された。研修内容については、2015年度の研修引率者である本学の太田直人准教授が

執筆した文献(照屋ら2016:108)を参考にする。本研修プログラムは、3つのカテゴリーに分類できる。

- 1) ハワイの自然・文化体験学習(・Waipa FoundationでのTaroの収穫体験・Smith's Garden Luau訪問見学・ハワイの文化学習(移民の歴史/Lei制作/Hula体験/ハワイ語講習)・National Tropical Botanical Garden訪問)
- 2) 地域交流・社会見学・現地生活体験(・琉球太鼓クラブとの交流・マリオットホテル/ハワイアン航空見学・Boys & Girls Clubでの交流・ホームステイ)
- 3) KCCでの学習・交流(・日本語クラス履修学生との交流・観光学/植物学のクラスでのプレゼンテーション・Global Dayでのパフォーマンス&プレゼンテーション・ESL Class(KELA: Kauai English Language Academy))

3.3. 事後学習

研修後、学生達に、「研修に参加して学んだこと、感じたこと」という題で、日本語2,500文字の「海外研修レポート」を提出してもらった。

4. 研究方法

4.1. 調査対象者

調査対象者は、2016年度ハワイ研修に参加した英語系(短大英語科/四大英語コミュニケーション学科)の学生9名である。調査対象者の個人情報を下記の表2に示した。

表2 調査対象者の個人情報

名前	性別	年齢	研修前の渡航経験	英語資格(英検・TOEIC)	留学希望	外国語を使う仕事を希望	海外で働く希望
A	男	20	なし	TOEIC515点	あり	あり	あり
B	女	19	なし	英検準2級	あり	あり	あり
C	女	19	なし	英検3級	あり	あり	あり
D	女	20	なし	英検4級	あり	あり	あり
E	女	19	あり	英検準2級	あり	あり	あり
F	女	19	なし	英検2級	あり	あり	あり
G	女	19	なし	英検2級	なし	あり	あり
H	女	20	なし	英検準2級	あり	あり	あり
I	女	19	なし	英検2級	あり	あり	あり

調査対象者の性別は、男性1名、女性8名である。年齢は、19歳が6名、20歳が3名、平均年齢は19歳である。研修前の渡航経験は、「あり」が1名、「なし」が8名である。渡航経験ありと答えた学生は、米国に1カ月間滞在していた。保有する英語資格は、TOEIC515点が1名、英検2級が3名、英検準2級が3名、英検3級が1名、英検4級が1名であった。留学を希望している学生が8名、外国語を使う仕事に就くことを希望している学生が9名、将来、海外で働く希望のある学生が9名であった。

4.2. 方法

調査対象者には、研修後、1週間以内に、「研修に参加して学んだこと、感じたこと」というテーマで、日本語2,500文字以上の「海外研修レポート」を提出してもらった。この調査対象者9名が提出した「海外研修レポート」をデータとして用い、石井（2013；同掲書）の分類（表1を参照）を理論的枠組みとして分析・考察を行った。

5. 結果

参加学生9名が提出した「海外研修レポート」を分析した結果、彼らが本研修を通して学び感じたことは、次の6つのカテゴリーに分類することができる：「5.1.ハワイ文化に対する気づき」、「5.2.自文化に

対する気づき」、「5.3.ハワイと沖縄（日本）の比較」、「5.4.コミュニケーションの重要性」、「5.5.自己を知る」、「5.6.感謝の気持ち」。各カテゴリーをさらにサブカテゴリーに分類し、それを以下、表3に示した。以下、参加学生の「海外研修レポート」における記述を紹介しながら詳述していく。

5.1. ハワイ文化に対する気づき

5.1.1. ハワイ文化に対する気づき

本研修中、学生達は、Waipa Foundationでのタロイモの収穫体験をしたり、レイの制作、フラダンスの体験、ハワイ語講習などを通して、ハワイ文化を学習した。これらの体験学習を通して、彼らは、ハワイ文化に対する気づきを経験した。

例えば、Bさんは、「ハワイアンとカロの関係について奥深い歴史を学んだ。ハワイの主食であるカロ（タロイモ）はハワイアンにとって兄弟のような関係である。それは、昔ある一人の女神が子を授かったが、未熟児で生まれたため生きることができなかった。女神は、その子を家の東に埋めた。するとそこから茎が伸び、それがカロの誕生であったのだ。それから、ハワイアンにとってカロは大切な存在、兄弟のような関係となったのである。」と記している。ハワイの自然・文化体験学習を通して、学生達は、ハワイの人々が培ってきた歴史、文化、言語、生活に高い関心を示し、多

表3 本研修を通して学生達が学び感じたこと

カテゴリー	サブカテゴリー
5.1. ハワイ文化に対する気づき	5.1.1. ハワイ文化に対する気づき 5.1.2. ハワイ人の気質に触れて
5.2. 自文化に対する気づき	5.2.1. 自文化を知る 5.2.2. 自国を知ることの大切さ
5.3. ハワイと沖縄（日本）の比較	5.3.1. 日本と海外の比較 5.3.2. ハワイと沖縄の類似点／相違点 5.3.3. ハワイと沖縄の言語
5.4. コミュニケーションの重要性	5.4.1. コミュニケーションの重要性 5.4.2. 自分の意見を伝えること 5.4.3. 英語を話せなくてもコミュニケーションすること 5.4.4. 人との出会いの素晴らしさ
5.5. 自己を知る	5.5.1. チャレンジ精神（積極性）の芽生え 5.5.2. 英語を理解できず悔しい思い 5.5.3. 自分に自信を持つこと
5.6. 感謝の気持ち	5.6.1. 感謝を込めて

くのことを吸収していった。

5.1.2. ハワイ人の気質に触れて

また、学生達は、「ハワイ人の気質について」も触れている。「ハワイの人のパワフルさから元気をもらった (Dさん)。」「ハワイの人はチャレンジ精神が強い (Eさん)。」「ハワイの人のコミュニケーション能力の高さに驚いた (Eさん)。」などの意見が寄せられ、ハワイ人の明るく陽気で積極性のある態度に影響を受けたようであった。

5.2. 自文化に対する気づき

5.2.1. 自文化を知る

学生達は、研修中、ハワイの人々の前でエイサーを披露することが課せられていた。Aさんは、ハワイの人々の前でエイサーの踊りを披露することを通して、「自分達を誇らしいと思った。」、Bさんは「エイサーを通して、自国の文化が人を感動させたり、楽しませたりできることを知った。」と記している。また、Eさんは、「一度外に出てみると母国の大切さが分かる」という言葉を身にしみて感じた述べている。このように、学生達は、海外で自分達の伝統文化を披露することを通して、今まで感じたことのなかった自文化に対する誇りや素晴らしさを実感したようである。また、Eさんは、「沖縄の大切な文化を後世につないでいくことの大切さを感じた。」と記している。

5.2.2. 自国を知ることの大切さ

Fさんは「沖縄のことについて聞かれたが、答えられず、いかに、沖縄、日本のことを知らないか思い知らされた。」「他の国の歴史や伝統、文化を知りたいという理由で留学を希望しているが、まずは沖縄のことを学ぶことから始め、沖縄のことについて自信を持って話せるようになりたい。」と記述している。さらに、本研修では、ハワイの沖縄系移民の子弟達が結成している琉球太鼓クラブとの交流があったが、その時に、Gさんは、「沖縄県民がエイサーを教えるのが当たり前なのに、琉球太鼓の彼らから教えてもらった。私たちは沖縄の文化を全部は知らない。沖縄を知ることからが私たちの課題だと感じた。」と記している。沖縄県民の自分たちよりも、ハワイの沖縄系移民の人々の方が、沖縄の伝統文化をよく知っており、それを大切

にしていることに衝撃を受けたようである。

このように、学生達はハワイの人々から沖縄のことを聞かれて答えきれず、いかに沖縄のことを知らなかったか、そして、海外の移民の方が沖縄の文化を大切にしているのを見て、自分達ももっと自国の文化を知り大切にしなければならないと実感している。

5.3. ハワイと沖縄 (日本) の比較

5.3.1. 日本と海外の比較

学生達の間では、日本と海外の教育の違いについての気づきが見られた。Eさんは、KCCでの授業を通して、「日本では集団的な教育だが海外では個人個人を尊重していたので、そこからいろんなコミュニケーションの取り方を学んでいた。」と記述している。また、Fさんは、「日本では間違いをしたりミスをするとな怒られたり馬鹿にされる。そうすることで間違いを恐れ消極的になってしまう。カウアイ島で、ホームステイの家族とバレエの試合を見に行ったとき、ミスをした子に「ナイス、トライ」と声をかけ、次にどうすべきかアドバイスをしていた。」と述べ、日本は厳しく叱ることによって、ハワイは励まし褒めることによって子ども達を教育していくことを認識していた。また、Fさんは、KCCでの授業を体験して、「日本も批判的思考を教育の現場に取り入れるべきだと思った。」と述べ、個人の批判的思考を大切にするハワイの教育観を見習うべきだと提案している。

5.3.2. ハワイと沖縄の類似点／相違点

ハワイと沖縄の類似性については、「カウアイ島の自然や食事、文化を知り、沖縄と似ていることを知った (Gさん)。」「ハワイと沖縄の似ているところは、昔は独立していて、特有の言葉を持ち、いろんな国との交易が盛んだった。歴史も似ている部分が多い。ハワイ語をしゃべれる人が少ないのは、沖縄も共通している (Fさん)。」と述べている。

ハワイと沖縄の相違点については、Fさんが、「自然に対する気持ちの違い」を挙げていた。研修中に訪れたカウアイ観光局のスタッフの説明によると、カウアイ島は自然を残すために約10年間は土地を開発しないように、土地を買った人と契約を結んでいるそうだ。Fさんは、この話を聞いて、「沖縄は海を埋め立て、森林を伐採し、自然を破壊している。」「沖縄の自然を

活かした観光業を考えるべき。」と提案している。

5.3.3. ハワイと沖縄の言語

ハワイと沖縄の言語については、Eさんが「沖縄にも独自の言葉があるように、ハワイにもハワイ語があることを知った。」「ハワイではハワイ語をなくさないために幼少期にハワイ語を学校で学ぶので、英語とハワイ語を両方話せる人が多かった。沖縄にもこの制度を取り入れるべき。」と提案している。また、Eさんは「ハワイには、Okinawanという言葉があることを知った。沖縄の人という意味で、日本人とは区別して使う言葉。」と述べ、ハワイの沖縄系移民が他府県出身移民と区別して「Okinawan」と使っていたことを知り、Eさん自身が、ウチナーンチュとしてのアイデンティティに気づいたことを記していた。

5.4. コミュニケーションの重要性

5.4.1. コミュニケーションの重要性

まず、コミュニケーションの重要性については、「英語を通してコミュニケーションできたことが良かった

(Aさん)。」「プレゼンを通じて、自分の英語が通じたことが嬉しかった(Cさん)。」などの意見に見られるように、今まで培ってきた自分の英語能力を、現地の人とのコミュニケーションを通して使うことができたことに喜びを感じている学生が見られた。また、現地の人とのコミュニケーションを通して、「研修前よりも視野が広くなり、相手とのコミュニケーションや意志を強く持つことの大切さを知った(Gさん)。」、「コミュニケーションの大切さ、積極的に行動することの大切さを学ぶことができた(Eさん)。」などの意見が見られた。学生達は、ハワイの人々とコミュニケーションを図る中で、自分たちの価値観が変えられていき、相互に理解を深め関係性を築いていく上で、コミュニケーションをとることが大切であることを実感したようである。

5.4.2. 自分の意見を伝えること

研修中、カウアイ観光局を訪問した時に、スタッフの説明後、「何か質問はありますか?」と尋ねられ、だれも質問することができないという状況があった。その時、KCCスタッフの池田恭子さんから「物事に対する姿勢を変えるべき。2週間は短いから、何事に

も自分から積極的に取り組まないと、何も学ぶことはできない。」と叱咤激励を受けた。その言葉がきっかけとなり、Iさんは、「この日から池田さんの言葉をしっかり心に留め、何事にも自分から積極的に取り組むことを信念にして行動することを心がけた。その後、自分から学生に話しかけることができ、楽しく会話することができた。」と述べている。

また、Gさんは、「海外の学生は質問もたくさんするし、私たちが発表を終えて、この発表の内容の感想も積極的に意見を言う、ということが私たちと違うと感じた。私は積極性が足りないと自分自身思った。」と述べている。その他に、「自分の意見を伝えることは大切だと学び、感じた(Dさん)。」という意見があった。

学生達は、ハワイの人々が積極的に自分の意見を主張し、言語コミュニケーション能力が長けていることに刺激を受けたようである。日本の非言語コミュニケーションを重視する消極的態度を改めて、自分の意見をしっかり伝えていくことの大切さを実感している。

5.4.3. 英語を話せなくてもコミュニケーションすること

KCCの日本語クラス履修の学生と交流する機会があった。彼らは、日本の文化や日本語に大変関心があり、たどたどしい日本語で、積極的に学生に近づいて行きコミュニケーションを図っていた。学生達は、彼らの積極的な態度に刺激を受けたようである。

「完璧な英語でなくても大事なのは伝えようという気持ちを学んだ(Fさん)。」、「英語を完璧に話せなくても、少しの単語でコミュニケーションをとれることがわかった(Dさん)。」「英語の単語が分からなくても、簡単な単語を組み合わせて工夫して話した(Eさん)。」の意見に見られるように、ネイティブのような完璧な発音や文法で話せなくても、自分が持っている英語の知識を活かして、コミュニケーションをとる方法を学んだようである。

5.4.4. 人との出会いの素晴らしさ

Fさんは、「人と関わるのは面倒だと思い、避けてきたが、研修を終えて、人との出会いは、自分を成長させることだと気づいた。人との出会いを大切にしていきたい。」と記している。また「人と人の出会いが素晴らしいことを知った(Dさん)。」という意見が

あった。

ハワイの人々の相手を包み込むような包容力、その人をありのままに受け入れてくれる愛情の深さが、学生達にも伝わったのではないか。ハワイの人々との出会いを通して、彼らは自分が成長したと感じ、人との出会いは素晴らしいものであると実感したのだろう。

5.5. 自己を知る

5.5.1. チャレンジ精神（積極性）の芽生え

日本人は、一般に、集団主義で自分の意見を主張せず、周囲に調和する傾向がある。その点で、日本人学生は、海外の学生と比較して、消極的であるという印象を持たれる。本研修に参加した学生達も、ハワイの人々と自分を比較して、いかに自分たちが消極的であるかを認識したようである。ハワイの人々の積極的態度は、学生達に刺激を与えた。

「何事にも挑戦する「積極性」を学んだ（Eさん）。」「何事にも自分から積極的に取り組むことは大事なことでと初めて気づくことができた（Iさん）。」などの記述に見られるように、ハワイの人々と自分達を比較することによって、自分達の消極的態度を見つめ直し、もっと積極的に何事にも挑戦する姿勢を身につける必要性を学んだようである。

また、「もっと海外に行き、いろんな経験をしたかった（Cさん）。」「この研修を通して、海外に興味を持つことができ、もっと学習したいという気持ちになった（Gさん）。」と述べているように、ハワイ研修での体験は、学生達が海外に出ることに興味を持ち、海外でいろんな経験をしたという希望を持つきっかけを与えることができたと言える。

5.5.2. 英語が理解できず悔しい思い

現地の人とのコミュニケーションにおいて、学生達は、今まで培ってきた自分の英語能力が、なかなか活かさないことにショックを受け、悔しい思いを経験していた。

例えば、Fさんは、「本場の英語を聞いて自分の英語力のなさにショックを受けた。自分が言いたいことが言えず、スピーキング力の低さを思い知らされ、とても悔しかった。」と述べている。また、Gさんは、「KCCでのスピーチを通して、英語で自分が伝えたいことが話せないことが多くあり、自分自身の英語能

力の低さを実感した。」と述べている。今回の研修において、自分の英語能力を試す機会を得ることができた喜び（「5.4.1. コミュニケーションの重要性」）を経験する学生がいる反面、自分の英語能力の低さを思い知らされ、自分が言いたいことを英語で伝えきれなかった悔しさを経験している学生もいた。

今回の研修で、学生達は、自己の英語能力のレベルを知ることができたと思う。

5.5.3. 自分に自信を持つこと

Iさんは、今まで、自分は「優れた才能を持っているわけでもなく、自慢できるほど得意なこともないと思っていた。自分に自信を持っている友達を見ていると、うらやましくて、悔しい気持ちがあった。」と述べている。しかし、今回のハワイ研修で「ホームステイ先のお母さんが、「趣味は？特技は？」と聞いたとき、答えることができなかった。自分のことは自分が一番知っていると思っていた。それなのに、自分自身の質問に答えられなくて、すごくショックだった。それから、初めて自分について考えてみた。すると、書道が浮かんできた。6歳の頃から書道を習っていた。特技とっていいほどのすごい実力はないので、特技として考えたことがなかった。しかし、彼女に書道が特技だと言うと、写真を見せてくれと言われた。すごく褒めてくれ、これは特技に入ると言ってくれた。見つけられなかっただけで、こんな私にも特技があったことにすごく感動した。それから、前よりは自分に自信を持つことができた。」と述べている。Iさんは、「自分に自信を持つことの大切さは日本では絶対に気づくことができないことだと思った。これからも、自分に自信を持つということを大事にしていきたい。」と述べている。

このように、学生達は、その人の個性を伸ばすというハワイの教育観に触れて、今まで、気づけなかった自分の才能や特技に目覚め、自信を持つことができるようになっていった。

5.6. 感謝の気持ち

5.6.1. 感謝を込めて

本研修の最終日、卒業式が開かれた。本学の学生、引率者の他に、学生達を受け入れてくれたホストファミリーの方々、KCCの教員・スタッフなどが出席した。学生達は、ムームーやアロハシャツに身を包み、晴れ

晴れとした姿で卒業式に臨んだ。

修了証書授与式の後、学生達は、ホストファミリーやKCCの関係者の方々に感謝を込めて、エイサーとフラダンスを披露し、沖縄の曲「涙そうそう」を合唱した。この踊りや歌には、学生達がハワイで自分達を受け入れてくれた人々に対する感謝の気持ちが込められており、観客席の人々は感動して涙を流していた。本研修のプログラムの中でも、最も感動的で印象深い一場面であった。

学生達はこの様な感想を述べている。「感謝を込めて、エイサー、フラ、歌を披露した（Bさん。）」「涙そうそう」を歌っている時、いろんなことがこみ上げてきて涙が止まらなかった（Dさん。）」「（ホストファミリーが）「またいつでも帰っておいで」「ohana（家族）」と言ってくれた（Eさん。）」「ハワイでお世話になった人達に恩返しがあった（Dさん。）」

本研修は、KCC関係者、本学の教職員、その他様々な人々の労力と支えがあって実現した。これらの人々の愛情や思いが学生達にもひしひしと伝わっていた。学生達は、ハワイで出会った人々の愛情や支えを忘れることなく、この出会いを大切にしながら、今後も、成長していくのだろうと実感した。

6. 考察

この項では、石井（2013；同掲書）の分類（表1を参照）を理論的枠組みとして、学生達が本研修を通して、どのような異文化コミュニケーション能力を身につけることができたのか、「5. 結果」に基づいて、考察していく。

6.1. 認知

石井（2013；同掲書）によると、認知とは、異文化コミュニケーションにおいて必要とされる知識、ものの見方、考え方などを指す。石井（2013；同掲書）の分類（表1を参照）によると、認知は7つの項目に分類されているが、本稿の結果では、そのうち、①自文化（自己）への理解、②非自民族中心主義、③外国文化への興味、④知的能力、⑤判断力の5つの項目が見られた。①自文化（自己）への理解では、例えば、ハワイで自分達の伝統文化を披露することを通して、学生達は自文化に対する誇りや素晴らしさを実感した。また、ハワイの人々の積極的な態度と自分達の消極的な

態度を比較し、自己理解を深めることによって、積極的に何事にも挑戦する必要性を学んでいる。さらに、ホストファミリーから褒められることによって、自分の才能や特技に目覚め、自信を持つことができるようになった学生もいた。

②非自民族中心主義では、日本の非言語コミュニケーションを重視する態度を客観的に見つめて、ハワイの言語コミュニケーションを重視するスタイルと比較しながら、2つの文化を相対的に評価していた。③外国文化への興味では、ハワイの人々の歴史、文化、言語に関心を持ち、積極的に彼らの外国文化を学ぶ姿勢が見られた。また、④知的能力では、日本とハワイの教育観の違いや、沖縄とハワイの観光業のあり方の違いを客観的に評価し、⑤判断力では、日本の教育にも批判的思考を取り入れたり、沖縄もハワイの自然を活かした環境業を見習うべきであると判断し、提言を行っていた。

6.2. 情動

石井（2013；同掲書）によると、情動とは、異文化コミュニケーションにおける感情や態度に関わる能力を指す。石井（2013；同掲書）の分類（表1を参照）によれば、情動には5つの項目があるが、本稿の結果でも、⑥エンパシー、⑦寛容性、⑧感受性、⑨柔軟性、⑩オープンネスの5つの項目が見られた。⑥エンパシーでは、例えば、ハワイの人々や沖縄系移民の人々が、ハワイの文化や沖縄の文化を大切にしている姿を見て、学生達は彼らに共感し、自らも自文化を大切にする必要性に気づいていた。また、⑦寛容性では、ハワイの人々の明るく陽気で積極的な態度を寛容に受け止めたり、⑧感受性では、沖縄系移民が

Okinawanとしてのアイデンティティを持っていることに感激し、自分の中にもウチナーンチュとしてのアイデンティティがあることに気づいた学生もいた。⑨柔軟性では、ネイティブのような完璧な英語を話せなくても、自分が持っている英語の知識を最大限に活かして、コミュニケーションをとるなど、その場や状況に応じて臨機応変に対応していた。⑩オープンネスでは、ハワイの人々の積極的な態度をオープンに受け入れて、学生達も消極的な態度から積極的な態度へと自己を変化させていた。

6.3. 行動

石井 (2013 ; 同掲書) によると、行動とは、異文化コミュニケーションにおいて適切かつ効果的に行動する能力を指す。石井 (2013 ; 同掲書) の分類 (表 1 を参照) によれば、行動には 6 つの項目があるが、本稿の結果でも⑩役割行動、⑫コミュニケーション、⑬対人関係の 3 つの項目が見られた。⑩役割行動では、例えば、最終日の卒業式で、学生達は自分達を受け入れてくれたハワイの人々に対する感謝の気持ちを込めて、踊りや歌を披露した。学生達は自分達が受けたものを与えられたものに感謝して、しっかり恩返しするという自分達の役割を自覚し、それを行動で表していた。また、⑫コミュニケーションでは、ハワイの人々と接する中で、異なる文化を持つ人々を理解し関係性を築いていく上で、コミュニケーションをとることが大切であると実感していた。⑬対人関係では、ハワイの人々の人を包み込むような包容力やありのままに人を受け入れる愛情に感激し、彼らとの出会いを通じて、学生達は自分自身が成長したと感じ、人との出会いは素晴らしいものであると実感している。

7. おわりに

本研修を通して学生達は、異文化コミュニケーション能力の認知・情動・行動の 3 つの側面をバランスよく学習していることがわかった。

異文化コミュニケーション教育は、異文化についての概念や知識を与えるだけではなく、異文化を持つ人々との実際の交流を通して、彼らに対する暖かい理解を深め、彼らと共存できる情動や態度を育成するものである。本稿では、本学が実施している「ハワイ研修」プログラムが、異文化を背景に持つ人々との直接交流という体験学習を通して、異文化コミュニケーション能力の認知、情動、行動の 3 つの側面をバランスよく学習できるという点で、異文化コミュニケーション教育において効果的な教育方法であるということが実証された。今後も本研修が継続して実施されることを願うと共に、さらなる効果的なプログラム内容の発展のために研究を重ねる必要がある。

参考文献

石井敏他 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書

石井敏他 (2013) 『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣選書

田淵五十生 (1992) 「異文化教育と体験学習」渡辺文夫 (編) 『現代のエスプリ 国際化と異文化教育』至文堂 69-78. 照屋建太・Christopher Valvona・大城直人・内間貴士・川西康裕 (2016) 「「ハワイ研修・海外幼児教育研修」の継続・発展を願って (2) ～2015年度研修総括～」『沖縄キリスト教短期大学紀要第45号』沖縄キリスト教短期大学 107-127.

宮原哲 (2006) 『入門コミュニケーション論』松柏社
山岸みどり・井下理・渡辺文夫 (1992) 「『異文化間能力』測定の試み」渡辺文夫 (編) 『現代のエスプリ 国際化と異文化教育』至文堂 201-214.

Rubens, B.D. (1976) Assessing communication competency for intercultural adaptation. *Group and Organization Management*, 1, 334-354.

Intercultural Communication Competence of University Students who Participated in Overseas Training Program The Cases of the Student Participants in Hawaii Training Program in 2016

Kazuka Nakazato

Abstract

Many private universities in Japan offer an “overseas training program” as one of the best ways for developing intercultural communications during their higher education. The advantage of an “overseas training program” is not so much about learning new concept and acquiring new knowledge in intercultural communication, but about developing an emotional intelligence and attitude of coexistence with others from the direct experiences in socializing with local people.

The author joined “Hawaii Training Program” with Okinawa Christian University as a leader in 2016 and examined whether student participants could learn intercultural communication competence through their exchange with Hawaiian people. As a result of the observation, the author can report that participants did learn the three aspects of intercultural communication competence such as cognition, emotion and behavior in balance. This paper reports that the Hawaii Training Program maintained by Okinawa Christian University is an effective way of helping students develop intercultural awareness and skills through communication.

